

はじめに

人と本のかかわりには二つのタイプがある。一つは、本とは図書館で借りるもので、自分ではよほどのものではないかぎり買わないというタイプ。もう一つは、本は自分で買うもので、図書館で借りたものはなにか落ち着かないというタイプである。家人は前者、わたしは後者である。家人は、定期的に市の図書館へ行って、読み切れないほどの本を借りてくる。ちょっと興味があれば借りてくるわけだから、さっと見て面白くないと思えば、読まなければよい。だから、読み切れないほどの本を借りてきても大丈夫なのである。

一方、わたしは基本的に本屋で新刊書を見て、気に入ったものがあれば買う。アマゾンで買うことも多い。中にはこれは失敗したと思うものもある。そんな時は無理に読み続けず、うっちゃっておく（ある程度たまった古本屋に売る）。新聞の日曜版に出ている書評欄も決まって見る。『週刊読書人』などの書評紙も定期的に講読しているから、面白そうな本はどんどん出てくる。

家人は小さい時から、市の図書館へ通う習慣があったそうだ。そこは読みたい本の宝庫だったという。下の娘もそうで、小学校のときも図書室の本はほとんど読んでしまったそうだし、よく市の図書館にも通っていた。

この違いはどこからくるのだろうか。今振り返ると、わたしは市や学校の図書館、図書室へ通った記憶があまりない。あるのは、中学時代から友人とよく古本屋を漁ったことだろう。つまり、当時からわたしは本を所有したいという欲求があったのである。家人に言わせれば、所有欲が強いということになる。それが現在の研究室の大量の蔵書につながっている。だから、大学に就職して一番うれしかったのは、本が好きだけ買えるということだった。

本を買う

結婚して小遣い制になったからそうもいかなかったが、さいわいテキスト

トなどの印税、原稿料も入るようになったし、NHKのラジオ、テレビの講座を担当して、給与以外にある程度の蓄えができたから、本を買うのに不自由した記憶はない。それに、わたしは仕事のあとに仲間と酒を飲みに行ったりしないから、お金はたまにある会食と本代に使うぐらいである。

しかし、本を買うものにとって困るのは家人の冷たい視線である。昔、わたしの恩師は、後輩の結婚式で花嫁に向かいこういったことがある。結婚して夫にいつかはならないことが二つある。一つは「あなたまた本買うの?」。もう一つは「あなたこの本全部読んだの?」である。家人はあとのセリフは言わないが、さきのことばを変えていう「本は買った分だけ処分してね」。さいわいわたしは生活空間である家に本を積み上げるのは好きではない（といっても8段が6本はある）。だから、ふだんはとやかくいわれることはない。

本を処分する

それでも、本はけっこう処分してきた。愛大に赴任するときをはじめ、研究室は二度変わったが、そのたびに大量の本をあげたり売ったりしてきた。ふだんでも、半年に一度数箱の本を東京の古書店へ売却する。定年まであと半年となったこの夏、わたしは原稿を書くあいまに、処分する本を箱につめる作業をした。一番頭を痛めていたのは中国語の書籍で、過去T書店にかなりの量を引き受けてもらったが、もう限界というので、別の書店をさがした。今のところはかなりの本を送れそうである。

残りの本も、定年後家に持って帰らず、マンションを借りてそこでしばらく仕事をするつもりなので、本棚10本ぐらいは必要である。だから、今はこの残す本をしぼる努力をしている。かつて、大金をはたいて買った貴重書は、もともと古書店のオークションに出すつもりだったが、43年も務めさせてもらったお礼に大学に残すことにした。古書業界としては本が動かなくなるから、はなはだ迷惑な話なのだが、

地域政策学部
荒川清秀

特集 わたしと 本と 図書館と



書棚

昔、内田樹さんが、本がすべて電子化されたら、その人の家へ行って話をするとっかかりがなくなるといっていた。紀田順一郎さんは『蔵書一代』（松籟社）の中で、蔵書を整理するに当たり、「書籍なき家は、主なき家のごとし」（キケロ）ということばを思い出すといていた。書棚を見せるのはいやという人も多いだろうが、わたしは昔から人を研究室に呼び入れ、すすんで見せてきた。だから、人の書棚を眺めるのもすきである。以前、ある院生の部屋へ行ったら、教科書しか書棚になく、驚いたことがあった。院生で教科書しか読まないというのはちょっと悲しい。

書評を書く

わたしは10年くらい前から、本を読んだら簡単な感想を自分のホームページのブログに書くようにしている。すでに560冊は書いている（これ以外に正式に依頼された書評もかなりの数書いている）。本というものはすぐ感想を書かないと印象が薄れるし、中味さえ忘れてしまう。あ、こんな本を読んでいる、いいこと書いてるなああとで読み返して思うほどだ。しかし、一冊書くのに1時間くらいはかかる。というのは、個人のブログでも人に読まれることがあるから、変な文章は書けないのである。しかし、これは文章修行に役に立つ。

書齋・書庫

退職したら書庫を建てないのですかと聞かれることがある。松原隆一郎さんは一万冊を収める螺旋式の書庫を建てた（『書庫を建てる』新潮社）。愛大の先生でも退職後建てた人がいる。書庫にはあこがれるが、死んだあと処分する人のことを考えるととてもそんな気にはなれない。

書評紙 書評書

齋藤孝さんは、『10分あれば書店に行きなさい』（メディアファクトリー）という本を出している。わたしも暇があるとすぐ本屋をのぞく。生協の書籍部も二日に1回は行くだろう。そこで、最近どんな本が出ているかを

しる。同時にわたしは『週刊読書人』という書評紙をずっと講読している。これはジャンルが広いから自分にとって歯が立たない分野もあるが、こんな本が出ていたのかと驚かされることもあって、図書購入に利用している。

ある時期は、谷沢永一、紀田順一郎、立花隆、鹿島茂、永江朗さんたちの書評集「本の本」を愛読して、自分の知らない本をたくさん教えてもらった。最近読んだ荻原魚雷さんの『古書古書話』（本の雑誌社）などは、読む本のジャンルの広さにはなはだ感心させられた。齋藤孝さんもそうした読書案内をたくさん書いている。最近では、『なぜ本を踏んではいけないのか』（草思社）がある。学生諸君は、まずこうした読書案内を読んで、自分の興味のある本に向かうといい。こういった人たちの読書量は膨大なもので、この年になっても手に触れたことのない本、読んだことがない本がたくさんあって呆然とするほどだ。

わたしと図書館

わたしが図書館のありがたみを感じたのは、日中共通の漢語の起源を調べるようになってからである。とっかかりは「熱帯」ということばだった。中国の外来語辞典では「熱帯」は日本人がつくった漢語だというのが、それなら「暑い地帯」だから「暑帯」になるのではないか。「熱帯」となるのは、気候の暑さにも「熱」を使う中国語においてではないか。そういう疑問をもち、調べていったのである。そのあと「回

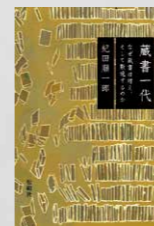
帰線」「海流」「貿易風」などの成立、伝播を書いていたら750枚にもなり、『近代日中学術用語の形成と伝播』（白帝社）と題して出版、母校の大阪市立大から学位をいただいた。「熱帯」の論文が1987年だから、1977年に大学に就職して10年たって本格的に図書館を利用しだしたことになる。

この調査は学際的で、日本語学会や科学史学会でも発表しているから、関連する本も多方面にわたる。わたしは基本的な本は手元に置きたい方だが、このときばかりはとても足りず、図書館の本を大いに利用させてもらった。これは愛大の図書館が多分野にわたり蔵書していたおかげである。もちろんそこだけでは足りず、宮城県図書館から天理図書館まで各地の図書館を渡り歩いた。英国図書館にもたびたびお世話になった。

大学図書館というところは、敷居の高いところである。それはちょっと風邪を引いたからといって大学病院へ行けないことに通じる。だから、学生の人たちはなんでもいいから調べものをしてみるといい。どうやって調べるかわからないときは、先生方もいるし、図書館のレファレンスの方々も力になってくれる。問題はなにを調べるのだが、これはふだんからつねになにかに疑問をもっていないとできない。なにかにひっかかることである。なにかを疑うことである。なんでもスルーしているようでは研究などしようがない。



週刊読書人
新聞
豊図開架 受入継続中
名図開架 受入継続中



蔵書一代
なぜ蔵書は増え、そして散逸するのか
紀田順一郎 著
(松籟社 2017)
豊図開架 024.9:K12



書庫を建てる
1万冊の本を収める狭小住宅プロジェクト
松原隆一郎、堀部安嗣 著
(新潮社 2014)
豊図開架 527.1:Ma73



10分あれば書店に行きなさい
齋藤孝 著
(メディアファクトリー 2012)
【メディアファクトリー-新書】
名図開架 024.1:Sa25



古書古書話
荻原魚雷 著
(本の雑誌社 2019)
豊図開架 024.8:025



なぜ本を踏んではいけないのか
人格読書法のすすめ
齋藤孝 著
(草思社 2019)
豊図開架 019:Sa25



近代日中学術用語の形成と伝播
地理学用語を中心に
荒川清秀 著
(白帝社 1997)
豊図開架 814:A63
名図開架 814:A63